様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2024
課題番号：１９Ｋ１３３３０

研究課題名（和文）平安時代後期政治構造の史料学的研究

研究課題名（英文）Historiographical research on the political structure of the mid-Heian period

研究代表者
黒須　友里江（Kurosu, Yurie）

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：２０７８１４３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、①藤原道長以降の摂関政治の様相を伝える貴族の日記の諸写本の調査や本文校訂を進めること、②院政につながる摂関政治の変容を明らかにすること、の2つを行った。
①では特に源経頼の『左経記』について諸写本の分類や古写本の調査など大きな成果が得られた。②では藤原頼通（道長の子）執政期の政務処理の方法を分析した結果、道長執政期との間に明らかな段階差を確認した。これにより、頼通の政治は道長の延長ではなく新規性に富んだものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
藤原道長以降の摂関期は日本が古代から中世へと変化する歴史上重要な時期であるにもかかわらず、前後の時期に比して史料の残存状況が悪く研究が進んでいない現状がある。
本研究では、この時期の史料を調査・整理することで研究基盤を整備するとともに、それらを用いて藤原頼通執政期の政治の特徴を明らかにした。このことは、古代史と中世史をつなぐという学術的意義を持つとともに、「摂関政治=藤原道長」という一般的イメージを見直すという社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：There are several diaries of the nobility in the regency period after the administration of Fujiwara no Michinaga. On this research, we surveyed the manuscripts of those diaries, and got big results particularly on “Sakei-ki”(written by Minamoto no Tsuneyori). Specifically, the classification of the manuscripts and the investigation of the ancient manuscript of “Sakei-ki” were achieved. In addition, we analyzed the way of political affairs processing by Fujiwara no Yorimichi (the son of Michinaga), and clarified that Yorimichi’s politics was critically different from his father’s politics.

研究分野：日本史

キーワード：平安時代　摂関政治　藤原頼通　左経記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

摂関政治の研究はこの４０年ほどで飛躍的に進展し、政治の具体的様相、天皇や摂政・関白、太政官といった政治の中枢をなす人々の役割や相互関係が、古記録の活用により明らかにされてきた。その中で特に研究が深化したのは藤原道長の時代である。この時期は、複数の古記録が残され同時代の儀式書も存在するなど、特異的に史料に恵まれており、それらを読み解くことで、道長が既存の仕組みと新しい方法を組み合わせて円滑な政権運営を行っていたことが解明された。一方で、中世史研究の立場から摂関政治と院政の連続性がたびたび指摘されてきた。院政期を中世の始まりと捉える考え方は現在広く受け入れられており、摂関政治から院政に至る過程を明らかにすることは、古代から中世への国家の変容を考える上で避けられない作業である。ただ、この作業はこれまで院政から遡る形で行われるのが主であった。それはかつて摂関政治研究が院政研究に遅れをとっていたためで、現在の研究段階においては摂関政治から院政への展開を考えることは十分可能であろう。ただ、そのためには道長以降の摂関政治を明らかにする必要がある。道長が摂関政治の象徴的存在として、息子頼通に摂政の座を譲った後も大きな政治的発言力を持っていたことはよく知られている。しかし、道長の死（1028 年）後、頼通は 1068 年までの 40 年間、続く教通は 1075 年までの 7 年間、師実は 1087 年までの 12 年間摂関の座にあり、道長がその権力の源泉である内覧に就任（995 年）してから摂政を辞するまで 22 年、死去がその 11 年後であったことを考えると、頼通・教通・師実の約 60 年間を軽視することはできない。

ただし、道長以降の摂関政治を考える上で大きな障壁となるのが、史料の残存状況である。道長の時代とは対照的に、頼通･教通･師実の時代は古記録をはじめとする史料の残存状況が悪い。また、『左経記』『春記』『水左記』といった残存している史料についても、「増補史料大成」以降まとまった形のテキストは提供されておらず、そもそもの研究基盤に大きな差があると言える。摂関政治から院政への展開を古代史の立場で論ずるためには、このような障壁を取り除くことが必要であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、①史料の整備状況を改善することで、摂関政治から院政への移行期として重要である頼通・教通・師実の時代にスポットライトを当てること、②当該期の政治構造はどのようなものか、またそれがどのように院政に展開していったのか、具体的に明らかにすること、の二点である。

３．研究の方法

①について、具体的に取り上げたのは『左経記』『春記』『水左記』である。『左経記』は全国各所に写本が所蔵されているが、それぞれの詳細な調査や相互関係、どの写本をテキストに用いるべきかといった検討はほとんど行われていなかった。そこで本研究では、まず各地で『左経記』諸写本の原本調査を行い、法量・冊構成・形態的特徴・内容・奥書などのデータを収集した。次にそれらのデータをもとに同一・類似の特徴を持つ写本をグループ化し、各グループの特徴や相互関係を検討した。また、古写本の調査をもとに、『左経記』の伝来過程についても考察した。『春記』についてはテキストに用いるべき写本がある程度はっきりしていることから、主に②で用いることとした。『水左記』については、自筆本などによる校訂本文の提供と註釈を行っている「水左記輪読会」に定期的に参加し、テキストや内容に関する議論を行った。

②については、特に長期にわたり摂関の座にあった頼通に注目して研究を進めた。本研究以前に道長による政務処理方法と院政との連続性について検討したことがあったため、それと比較する形で頼通による政務処理方法の特徴を分析した。

４．研究成果

①に関しては、主に『左経記』の写本調査・分類において大きな成果を得た。「史料紹介　佐藤道生氏所蔵『左経記』断簡」（『古文書研究』93 号、2022 年）においては、古写本およびその断簡の調査に基づき、現行テキストにない部分の翻刻を提示するとともに、『左経記』の伝来過程について論じた。「『左経記』諸写本に関する基礎的検討」（『東京大学史料編纂所研究紀要』33 号、2023 年）においては、調査した 48 の写本を 9 グループに分類し、それらの相互関係および最も古い形に近いグループを明らかにした。また、『水左記』の校訂・註釈を共著にて 5 本公表した。

②に関しては、頼通執政期には中世的な政務処理方法である「奏事」が多く用いられていることを明らかにし、「藤原頼通の政治手法」として口頭報告を行った（日本史研究会例会、2024 年）。この内容をもとに、奏事の展開と藤原頼通政権」（『日本史研究』746 号、2024 年）を執筆し、頼通執政期には新しい政務処理方法である「奏事」が八世紀以来の政務処理方法である「政」を侵食して拡大していったこと、このような動きは道長執政期には見られないことを指摘した。近年、中世的なものの始まりを道長に求める見解も提示されているが、政務処理方法に関して言えば中世に向けた動きが開始するのは頼通の時である。

また、有富純也編、磐下徹・十川陽一・黒須友里江・手嶋大侑・小塩慶著『日本の古代とは何か―最新研究でわかった奈良時代と平安時代の実像』（光文社、2024 年）では、近年進展した摂関政治研究を総括するとともに、道長以降の時期がその進展から取り残されており、この時期の政治を明らかにすることで道長の時代を相対化することが今後の課題であるという見通しを述べた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 磐下　徹,堀井　佳代子,宮川　麻紀,黒須　友里江	４．巻 75
２．論文標題 『水左記』註釈（治暦元年八月~二年正月）	５．発行年 2024年
３．雑誌名 人文研究 大阪公立大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 213-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 黒須　友里江	４．巻 93
２．論文標題 佐藤道生氏所蔵『左経記』断簡	５．発行年 2022年
３．雑誌名 古文書研究	６．最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒須　友里江	４．巻 33
２．論文標題 『左経記』諸写本に関する基礎的検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 磐下　徹,久米　舞子,宮川　麻紀,黒須　友里江,堀井　佳代子	４．巻 74
２．論文標題 『水左記』註釈（治暦元年正月～四月）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文研究　大阪公立大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 138-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 北村安裕，磐下徹，黒須友里江，重田香澄	４．巻 61
２．論文標題 『水左記』の研究―康平七年九月～一一月―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編	６．最初と最後の頁 142-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 北村安裕,久米舞子,黒須友里江,重田香澄,堀井佳代子	４．巻 60
２．論文標題 『水左記』の研究ー康平七年閏五月~六月ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編	６．最初と最後の頁 90-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 磐下徹,黒須友里江,堀井佳代子	４．巻 76
２．論文標題 『水左記』註釈（治暦二年三月~三年三月）	５．発行年 2025年
３．雑誌名 人文研究　大阪公立大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 181-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 黒須　友里江	４．巻 746
２．論文標題 奏事の展開と藤原頼通政権	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本史研究	６．最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 黒須　友里江
２．発表標題 藤原頼通の政治手法
３．学会等名 日本史研究会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 有富純也編・磐下徹,十川陽一,黒須友里江,手嶋大侑,小塩慶	４．発行年 2024年
２．出版社 光文社	５．総ページ数 304
３．書名 日本の古代とは何かー最新研究でわかった奈良時代と平安時代の実像	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関